

霧島山（新燃岳）の火山活動解説資料

福岡管区气象台

地域火山監視・警報センター

鹿児島地方气象台

＜噴火警戒レベル1（活火山であることに留意）から2（火口周辺規制）に引上げ＞

新燃岳では、火口直下を震源とする火山性地震が増加し、火山活動が高まっています。また、GNSS連続観測では、霧島山の深い場所でのマグマの蓄積を示すと考えられる基線のわずかな伸びが認められています。火山活動が高まっていることから、本日（27日）17時20分に火口周辺警報を発表し、噴火警戒レベルを1（活火山であることに留意）から2（火口周辺規制）に引き上げました。

【防災上の警戒事項等】

弾道を描いて飛散する大きな噴石が新燃岳火口から概ね2kmまで、火砕流が概ね1kmまで達する可能性があります。そのため、新燃岳火口から概ね2kmの範囲（図1）では警戒してください。

風下側では、火山灰だけでなく小さな噴石が遠方まで風に流されて降るおそれがあるため注意してください。

地元自治体等が行う立入規制等にも留意してください。

○ 活動概況（図1～6）

新燃岳では、火口直下を震源とする火山性地震が増加し、本日（27日）17時10分までの24時間で21回発生し多い状態となっています。火山活動が高まった状態となっていることから、27日17時20分に噴火警報を発表し、噴火警戒レベルを1（活火山であることに留意）から2（火口周辺規制）に引き上げました。火山性微動は観測されていません。

GNSS連続観測では、2021年12月頃から、霧島山を挟む一部の基線において、霧島山の深い場所でのマグマの蓄積を示すと考えられるわずかな伸びが認められます。

監視カメラによる観測では、火口西側斜面の割れ目において、2022年1月31日に高さ10m未満のごく弱い噴気を観測しましたが、2月上旬以降噴気の勢が増し、高さ100m程度で推移しています。新燃岳火口内の噴煙の状況に特段の変化は認められません。

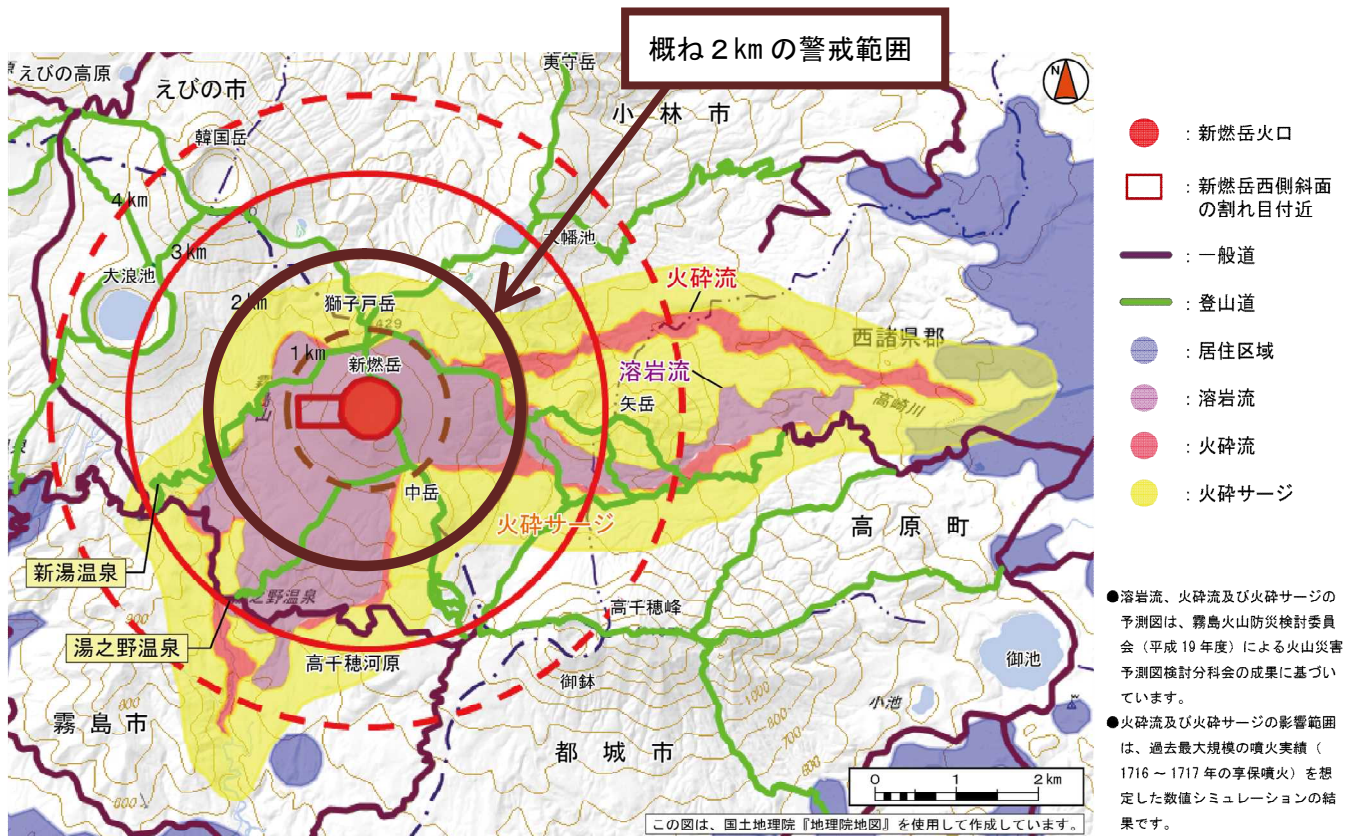
この火山活動解説資料は気象庁ホームページ（https://www.data.jma.go.jp/vois/data/tokyo/STOCK/monthly_v-act_doc/monthly_vact.php）でも閲覧することができます。

本資料で用いる用語の解説については、「気象庁が噴火警報等で用いる用語集」を御覧ください。

（<https://www.data.jma.go.jp/vois/data/tokyo/STOCK/kaisetsu/kazanyougo/mokuji.html>）

この資料は気象庁のほか、国土地理院、東京大学、九州大学、鹿児島大学、国立研究開発法人防災科学技術研究所、宮崎県及び鹿児島県のデータも利用して作成しています。

資料中の地図の作成に当たっては、国土地理院発行の『数値地図 50mメッシュ（標高）』を使用しています。



- 噴火警戒レベルに応じて下記のような防災対応がとられています。
 - レベル5（避難）：危険な居住地域からの避難。
 - レベル4（避難準備）：警戒が必要な居住地域での避難準備。要配慮者は避難等。
 - レベル3（入山規制）：火口から居住地域近くまで立入禁止（規制範囲は火口から概ね3km ○、火山活動の状況により概ね4km ⊙となります）。
 - レベル2（火口周辺規制）：火口から概ね2km 以内の立入禁止（規制範囲は火口から概ね2km ○、火山活動の状況により概ね1km ⊙となります）。
 - レベル1（活火山であることに留意）：火口内、西側斜面の割れ目付近及び火口縁への立入規制等。

図1 霧島山（新燃岳） 警戒が必要な範囲

弾道を描いて飛散する大きな噴石が新燃岳火口から概ね2kmまで、火砕流が概ね1kmまで達する可能性があります。そのため、新燃岳火口から概ね2kmの範囲では警戒してください。

風下側では、火山灰だけでなく小さな噴石が遠方まで風に流されて降るおそれがあるため注意してください。

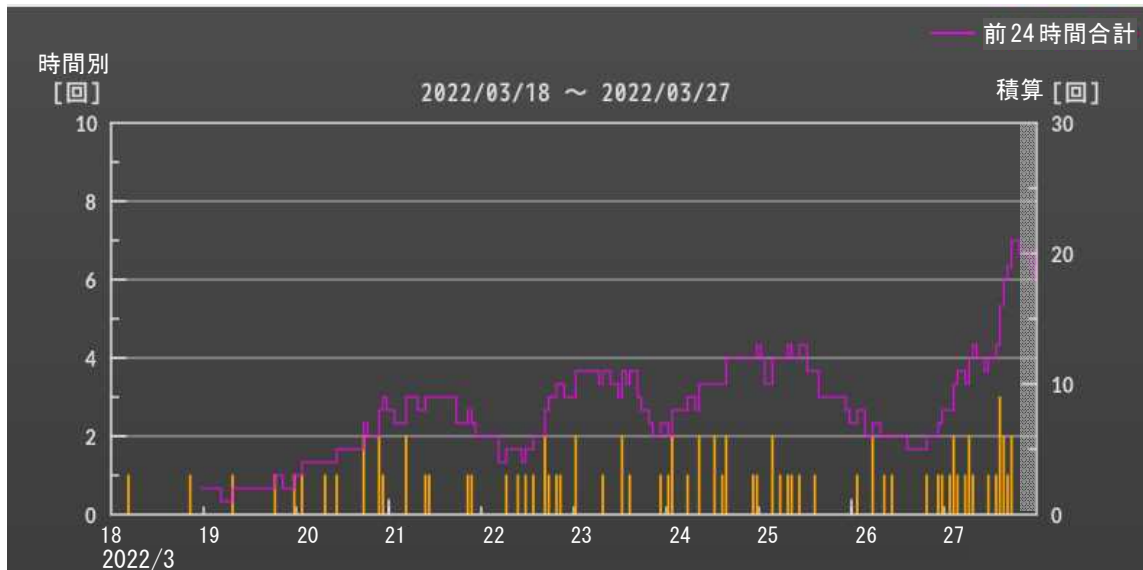


図2 霧島山（新燃岳） 火山性地震の時間別回数
(2022年3月18日～3月27日17時10分)

新燃岳では、火口直下を震源とする火山性地震が増加しています。本日（27日）17時10分までの24時間で21回と多い状態となっています。

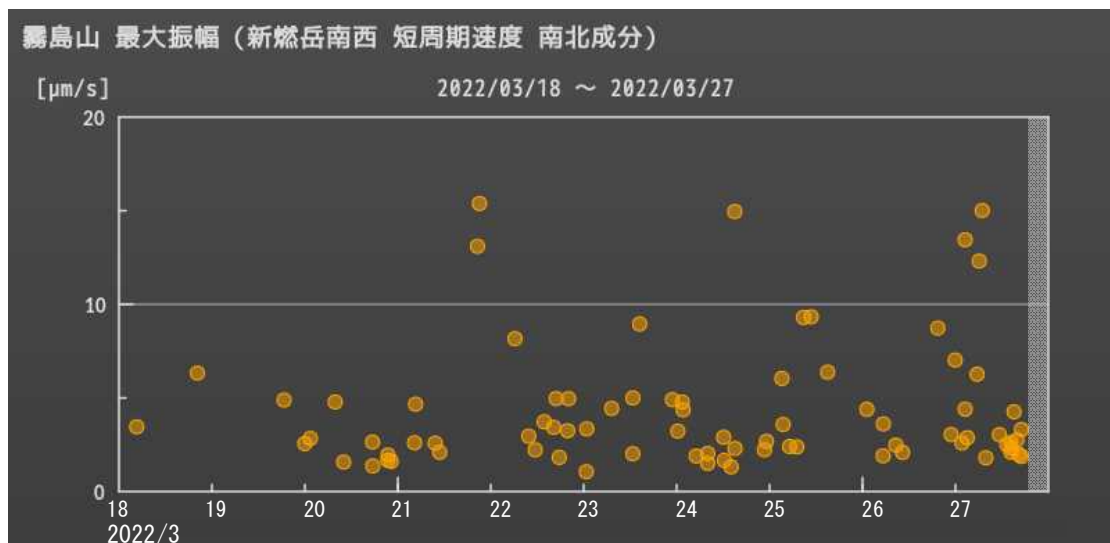


図3 霧島山（新燃岳） 火山性地震の最大振幅の状況
(新燃岳南西地震計：南北動成分、3月18日～3月27日17時10分)

新燃岳では、火口直下を震源とする火山性地震が増加しています。

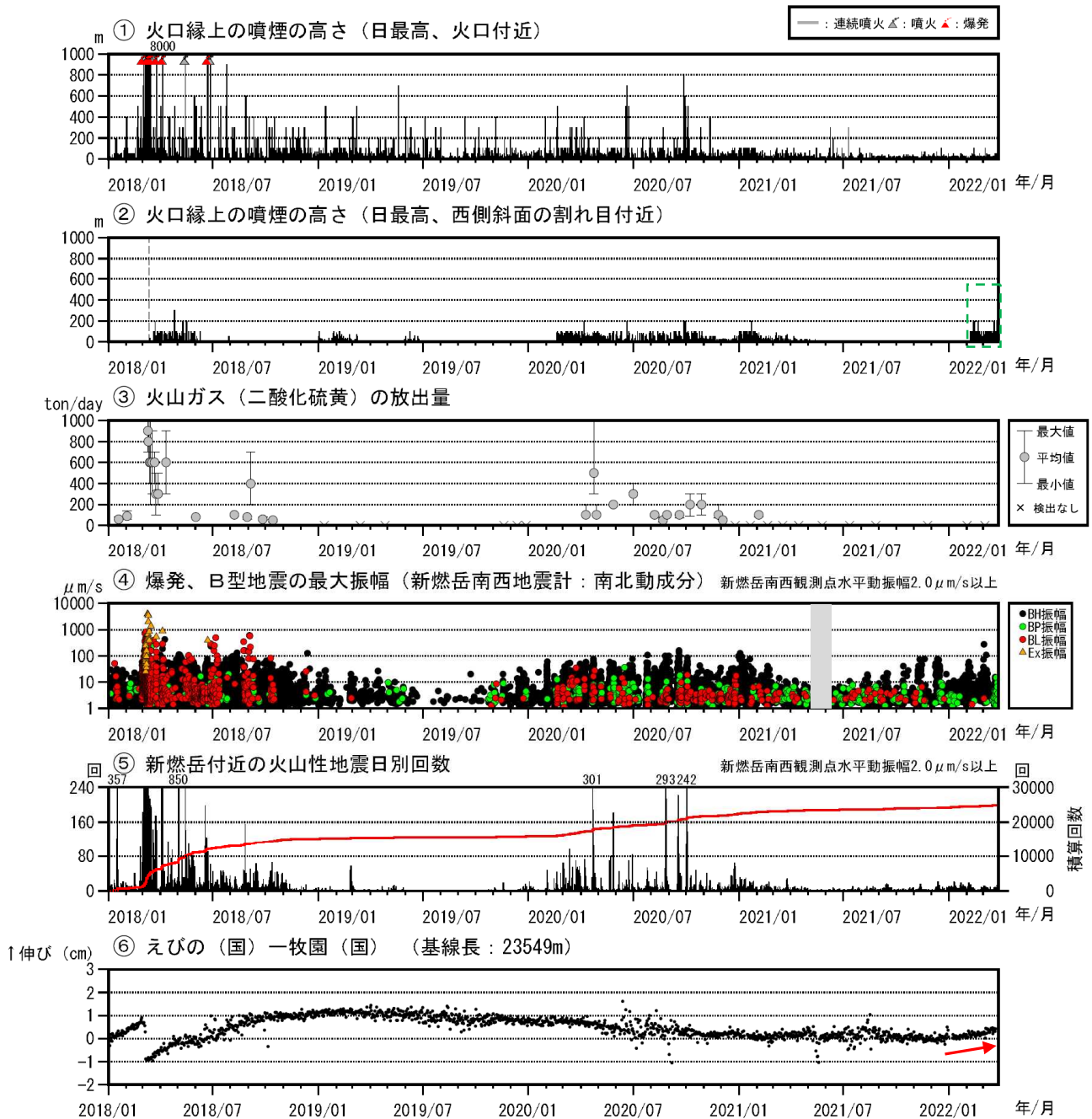


図4 霧島山（新燃岳） 火山活動経過図（2018年1月～2022年3月27日）

- ・ 火口直下を震源とする火山性地震が増加しています。
- ・ 監視カメラによる観測では、火口西側斜面の割れ目において、2022年1月31日に高さ10m未満のごく弱い噴気を観測しましたが、2月上旬以降噴気の勢いが増し、高さ100m程度で推移しています。新燃岳火口内の噴煙の状況に特段の変化は認められません（緑破線内）。
- ・ GNSS連続観測では、2021年12月頃から、霧島山を挟む一部の基線において、霧島山の深い場所でのマグマの蓄積を示すと考えられるわずかな伸びが認められています（赤矢印）。

④の灰色の領域は、新燃岳南西観測点の障害のためデータが抜けている期間です。
 ⑤の回数について、火山性微動の振幅が大きい状態では、振幅の小さな火山性地震の回数は計数できなくなっています。
 ⑤の赤線は、地震の回数の積算を示しています。
 ⑥の基線は図6の基線⑦に対応しています。

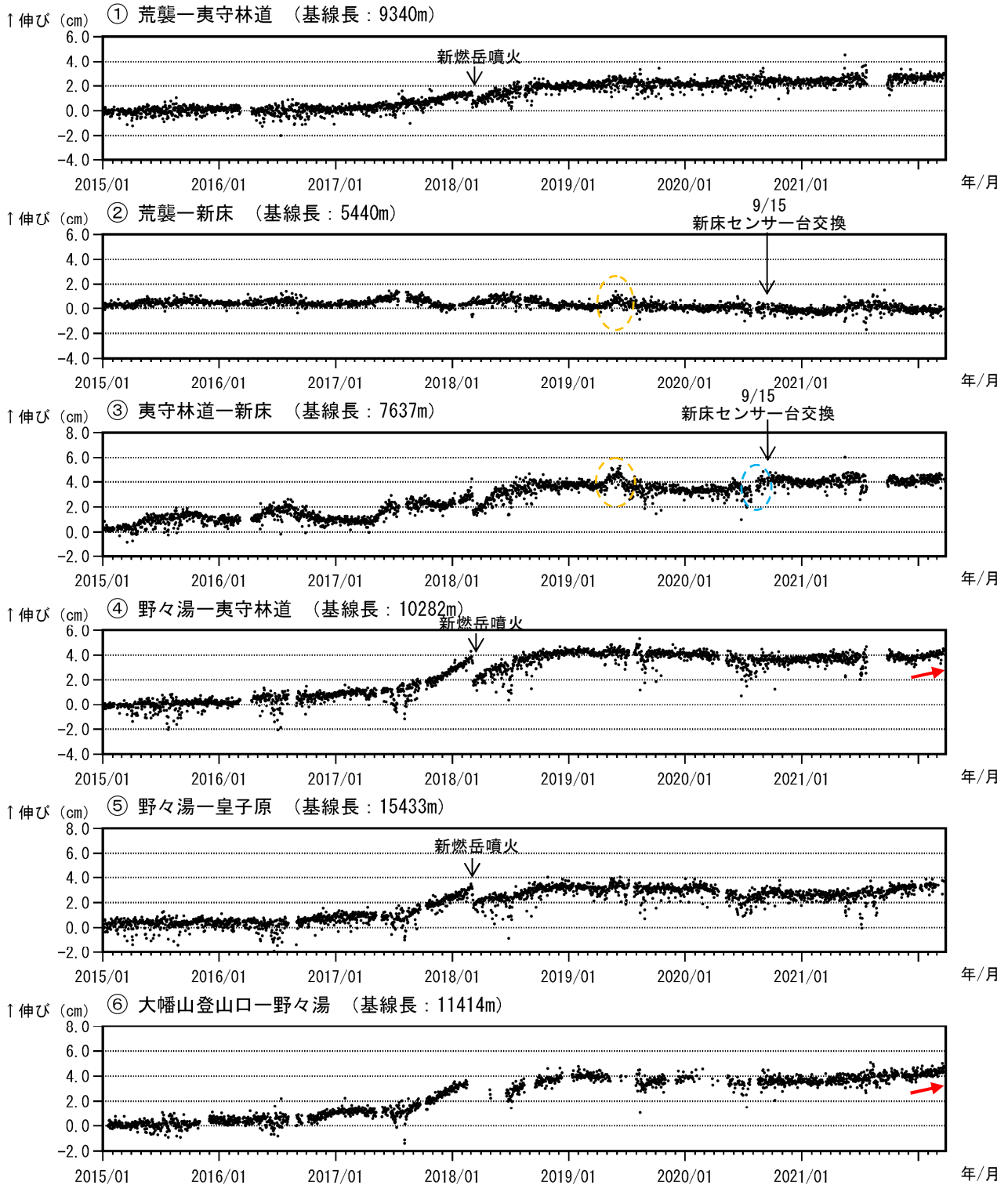


図5 霧島山(新燃岳) GNSS連続観測による基線長変化(2015年1月~2022年3月27日)

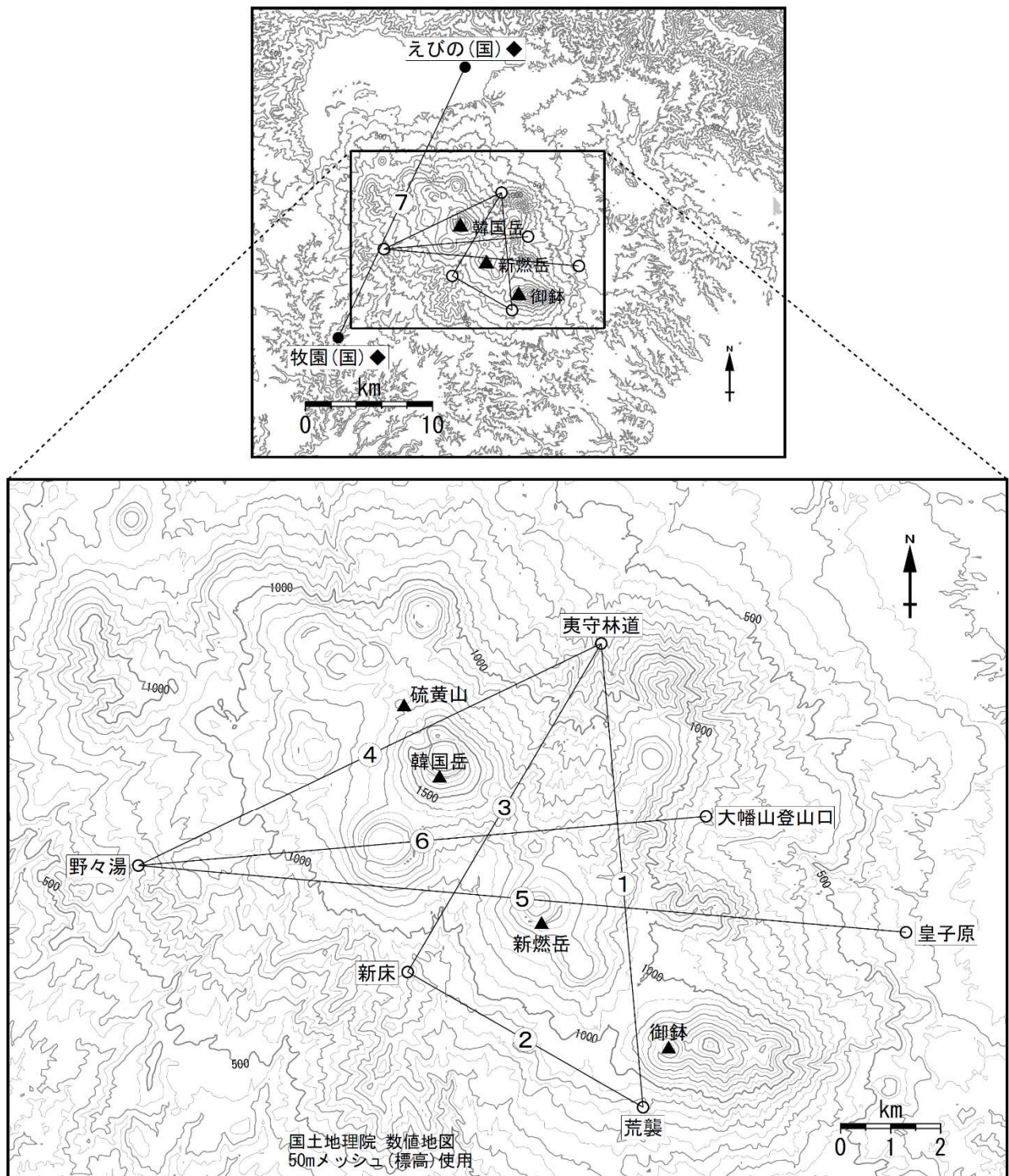
GNSS連続観測では、2021年12月頃から、霧島山を挟む一部の基線(赤矢印)において、霧島山の深い場所でのマグマの蓄積を示すと考えられるわずかな伸びが認められます。

これらの基線は図6の①~⑥に対応しています。

基線の空白部分は欠測を示しています。

橙色の破線内の変化は、新床観測点周囲の環境の変化に伴う影響と考えられます。

青色の破線内の変化は、新床観測点固有の局所的な変動による影響と考えられます。



小さな白丸 (○) は気象庁、小さな黒丸 (●) は気象庁以外の機関の観測点位置を示しています。
(国) : 国土地理院

図6 霧島山(新燃岳) GNSS連続観測点と基線番号

小さな白丸 (○) は気象庁、小さな黒丸 (●) は気象庁以外の機関の観測点位置を示しています。
(国) : 国土地理院

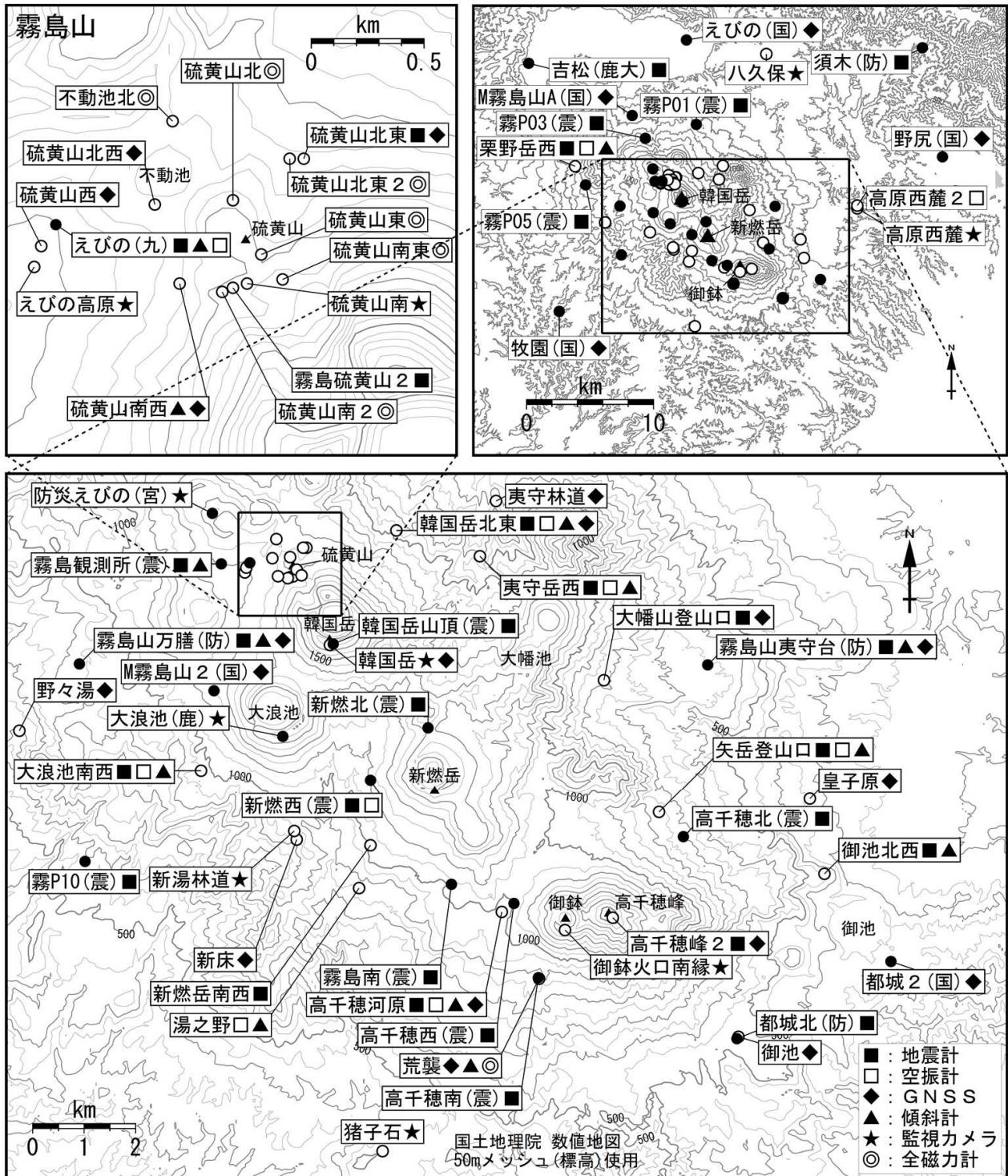


図7 霧島山 観測点配置図

小さな白丸(○)は気象庁、小さな黒丸(●)は気象庁以外の機関の観測点位置を示しています。
 (国)：国土地理院、(震)：東京大学地震研究所、(九)：九州大学、(鹿大)：鹿児島大学、
 (防)：防災科学技術研究所、(宮)：宮崎県、(鹿)：鹿児島県